



文化展

当季雑詠

湯河原俳句協会選

秋雲や鬼籍に入りし友の数
 星月夜一氣に本を読み終へて
 ひともとの紅葉かつ散る女坂
 ふるさとの友の便りや初時雨
 散策路うめんばかりに萩の花
 秋寒し黄泉への草鞋かたく結び
 赤とんぼ風の真中に停りをり
 畦道を行けど行けども曼珠沙華
 病む脚をさするも慣ひ秋深む
 すれ違ふ船に手を振り天高し
 撫子やわが娘も二児の母となり
 鐘の音の色なき風の中にかな
 鈍行の窓一面の秋の海
 菊日和母の形見の帯締めて
 琴の音のひびきてきたる醉芙蓉
 月の道手を結びたくなつてきし
 船宿の瘦せし柱やちちろ鳴く
 十三夜ひたすら潮の匂ひけり
 職人の輪の中にある大西瓜
 落ちさうでなかなか落ちぬ芋の露

小石川 文枝
 福田 啓子
 櫻井 登志子
 杉本 里風
 上野 矩子
 小澤 千代子
 林 きよみ
 田代 つる子
 吉田 誠二
 富岡 定子
 服部 辰雄
 小澤 スミエ
 佐原 瑠美
 中村 美和子
 中根 君子
 原田 みさお
 新田 順子
 高橋 千鶴子
 高橋 しのぶ
 府川 昭子

12月・1月は次のとおりです。多数ご応募ください。

月号	種別	テーマ・題	応募締切	応募先
12月	写真	特に限定せず	11月10日(金)	企画課
1月	俳句	当季雑詠	12月11日(月)	広報担当

一喜一憂

海辺で生まれ育った環境がそこさせるのか、一年の季節で最も好きなのは夏。

「夏がくれば思い出す」と夏の思い出にひたる間もなく初秋。日本の歌には、私の好む夏や春より秋の歌が多くあります。「更け行く秋の夜」から始まり、「こいしや故郷懐かし父母 夢路にたどるは 故郷の家路」冬が近づくと秋の歌には、どことなく寂しさを感じますが、私たち世代の愛唱歌として親しまれ、どれほど心の支えになったことが。昔懐かしい歌に出会うと、口ずさんだ頃の遠いふるさどが蘇ります。

少年の頃、たどった家路には、うつそうとした森の中に古い屋敷があり、毎日、屋敷の上を無数の鳥が飛び交い、塀の上からは年を経た木々が深い影を落とし、かすかに植物が放つ、湿ったような匂いが漂っていました。

しかし、今では自然と共生したやさしい町並みを出すことすら難しくなりました。世界中には、たくさん町があり、それぞれに魅力があります。京都、萩、札幌、ロンドン、パリ。誰もが知っている町でも、心に残るのは自分が子どもの頃を過ごした町ではないでしょうか。どんな町であっても、時とともに移り変わるのには当然ですが、そこに住んでいた人の心の中には、その時を共に過ごした人々との思い出と一緒に古い町が残っています。

町並みが美しいか否かは、そこにどれだけの自然が寄り添っているかだと思います。全ての動植物に命があります。それは、私たち人間社会と別のものではなく、人間の命の一部であり、自然の中の何かが失われるとすれば、私たち自身の一部を失うことになるのです。

「自然は、全ての病を癒す」とは、古代

ギリシャの医学者が残した言葉だと言われま

ず、心が癒される自然があります。この恵まれた自然と共生し、今すぐできること、そして、時とともに確実に発展し、生活者の心と文化、健康と命を守り、訪れる人々にも感動を与えてくれる景観の主役になるのは、ふるさとの自然です。

四季折々、自然に感動し、歩いて楽しい香りのある町を描いて取り組んでまいりました四季彩のまちづくりは、暮山の梅から城山のあじさい、星ヶ山のさつきと、十年の歳月を経て、十一月二十三日、池峯もみじの郷を一般公開いたします。

こうしたまちづくりが、全て自然にやさしかったのかの問いを突き詰めていけば、それは、どれほどの動植物と共存できたかの一点に行き着くと思います。

遠い将来、町を流れる二つの川には、白鳥が羽根を休め、町中をツバメが飛び交い、池のほとりには蝶やトンボが、近くの溪流にはイワナやマスが泳ぎ、蜚が乱舞する。全ての景観を包み込む自然との絆が深まり、自然と住む人々との新しい関係が育つ町であった時、評価されるのもしれません。

十一月は、秋から冬へ移り変わる月です。庭先や公園などの華やいだ紅葉の散るのを見ながら、人生や自然をしみじみと味わってみるゆとりもほしいと思います。

「こちらを見せおもてを見せてやるもみぢ」とかく華やかなものは、表面だけを飾りたがりますが、もみぢは、裏も表も、建前も本音も、すべてを見せながら黙って散っていく。朝もやに煙る静けさの残る池峯で、ひとひらの落ち葉を踏み締めるながら、「誰かさんが誰かさんが」と口ずさみ、それぞれの「小さき秋」を見つけてみてはいかがでしょうか。

町長

米岡幸男

